

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2012年度 全統センター試験プレテスト問題

国 語 (200点 80分)

2012年11月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。

① 受験番号欄

受験票が発行されている場合のみ、必ず受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

② 氏名欄、高校名欄、クラス・出席番号欄

氏名・フリガナ、高校名・フリガナ及びクラス・出席番号を記入しなさい。

- 2 この問題冊子は、42ページあります。なお、問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、10 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

河合塾

国

語

(
解答
番号

1

}

35

(

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

一人の女性作家が『フランケンシュタイン』という作品を書いています。

主人公はフランケンシュタイン男爵。彼は、優れた科学者で、自らの手で生命体を、それも人間を創造したい、つまり人間の創造主になりたいという(ア)トホウもない野心を抱いた人物です。彼はついに実験に成功します。この人造人間が命をもって動きだし、立ち上がった時、男爵は「わが子よ」と呼びかけています。しかし同時に彼は、この人間の姿のあまりの醜さと、自分の行為が神を恐れぬ行為であったことに恐怖を覚え、この人造人間を見捨ててしまいます。

物語は、この人造人間(彼は作り主によって名前を与えられることもなく、それゆえ、ただ「怪物」と呼ばれ続けます)が、自分の作り主であるフランケンシュタイン男爵を追い求める物語として展開していきます。この「怪物」はきわめてナイ(イ)セイ_イ的で、考え深く、そして情け深い、人間的な存在として描かれています。しかしその容貌の醜さは、彼が人間界に入ることを最後まで許しません。幾多の絶望ののちに、彼は殺人者となっていくます。そして、自分に生命を与え、自分を存在させた(そして捨てた)男爵に、なぜ自分を作ったのかと問い詰めるのです。いくつかのエピソードを経て、怪物と男爵の間で、互いに相手を滅ぼすための追跡劇が始まります。物語は、(ウ)コウリョウとした雪原で二人がそれぞれ別々の場所で息絶えるところで終わります。

男爵の行為は、何ゆえにこのような悲劇へと落ち込むことになったのでしょうか。この世に新しい存在を送り出すという意味では、彼の行為は親が子どもを作ることと本質的に変わりありません。ですからこの物語は、親は果たして子どもの創造者となりうるのか、子どもは親のうちに自分の創造者を求めるべきなのか、という問いを提起した物語とも言えます。フランケンシュタインは怪物を自分の創造物とみなしています。だからこそ、この作品が自分の思惑と異なるものであることがわかった時、何のためらいもなく、その存在を取り消そうとするのです。A子どもに手を焼いたあげく、「こんな子どもはいらない」と、時として叫んでしまう親に似ています。

怪物の方も、男爵を自分の創造主であると考えています。だからこそ、創造主にふさわしい愛と責任を彼に求めてやまないのです。^B「愛そうとしないのに、なぜつくった？」という怪物の叫びは、「産んでくれとたのんだ覚えはない」とか「なぜこんな自分を産んだのだ」という子どもたちの叫びと似ています。

ここで問われるべきことは、子どもの存在は親が与えたものなのか、ということでしょう。そもそも「存在」とは、誰かが誰かに与えることのできるものでしょうか。

子どもの遺伝的形質はすべて両親から与えられたものと言えるでしょう。さらに、子どもの出生後、その体を養うのも、その精神に最初の^(付)コクインを与え、名前を与え、最初の言語を教えるのも多くは親であるのだから、子どもの存在全体が親によって与えられたものであるとみなす向きも出てきます。実際、今日の心理学や教育学は人格形成にとって乳幼児期に^(付)コウムる親の影響がいかに重要かということをおかしてないほど強調し、そして、親たちに対して正しい育児やしつけのあり方を繰り返し説いてきました。親は子どもに対して、全能の創造主に等しいものであることが期待されているかのようです。このような親子観から見れば、フランケンシュタインとその怪物の不幸は、完全な人間を作ろうとしたフランケンシュタインが、思いに反してできそこないを作ってしまったことにこそあった、ということになるでしょう。

しかし物語が伝えているのは、そういうことはありません。フランケンシュタインの誤りは、人間が、もう一人の人間の創造主であろうとしたこと、そのものにあったのです。親はたしかに子どもの心身の形成過程に大きな影響を及ぼすとしても、しかし、親が子どもに「存在」を与えることはできない。子どもは最初からなぜだかわからないが、その子ども自身として存在しているのです。その存在を与えたものがあるとしたら、それは何、と名指すことのできるような、何かほかの存在するものではなく、たとえば^(注1)ハイデガーがのちに、Dasein（現存在）をEs gibt（それが与える）^(注2)と言いつつ換えたときの、「それ」(Es)にあたるような、非人称で表現するしかない何かであるとしか言いようがありません。この圧倒的な事実の前には、親はたまたまその子の親であったというにすぎません。親子であろうと、絶対的な他者関係に変わりはないのです。しかし他のいかなる関係にもまして、親子関係は、その本質からも、また、近代以降強調されるようになった家族感情からも、こうした他者関係を見失い

がちな関係です。怪物の悲哀は、彼が最後までフランケンシュタインの「作品」でしかありえなかった、というところにこそ由来しているように思います。彼は、決して自分自身の「存在」そのものを確信することができなかった。だからこそ、執拗に自分の作り主による愛と承認を求め続けずにいられたのでしょう。そしてそれはとりもなおさず、フランケンシュタインがこの人造人間のうちに、科学者としての自分の仕事の「成果」しか見出すことがなく、そこに「他者」の存在を見ようとはしなかったという事実と対応しています。フランケンシュタインは、たとえ実験が成功して、見事な人造人間を創ることができたとしても、どこまでも、さらにより完全な人造人間を求めて実験を続けたことでしょう。「作品」はどこまでも相対的な評価を求めるものだからです。親が子どもの他者性に気づかず、自分の創造物として見ている限り、親もまた、わが子を失敗作か成功作かという評価で見ることを免れることはできないでしょう。

親になるということは、**C**「他者としてのわが子」を引き受ける、ということなのです。このことをイメージとして思い描くため

D (注2)

に、デリダの「散種の子ども」という言葉を紹介してみたいと思います。散種とは、文字通り種をまき散らすという意味です。植物の種は風に乗って吹き飛ばされて、どこかに落ちてそこで芽を出します。種をまき散らした木は、自分の種がどこでどのような花を咲かせているか知りようもなく、また、種の方も気がついて見たらここで芽を出していたので、もとの木のことは知りようがありません。それはずいぶんとふっきれたさわやかな関係で、種を運ぶ風の吹きわたる音が聞こえてきそうな光景です。もとより人間は、植物ではないので、このようなさわやかな親子関係をもつことはできません。しかし、子どもを持つ、親となる、ということをおこなうようなイメージで自ら意識して思い描くことはできます。

デリダはこの散種という言葉で、親子関係に限定して使っているわけではありません。むしろこれは、ものを書く人とその書かれたもの（テキスト）との関係で言われているものです。ひとたび書かれたテキストは、その書き手のところには戻ってこない。それは種のように飛んで行って勝手な場所で、芽を出すのです。テキストは書き手の意図や思惑のなかに決まるとどまっているのではなく、さまざまなところでさまざまな新しい意味を生みだし続けるのです。テキストを「作られたもの」と拡大して

考えれば、あらゆるものとその作り手との間でも同様の関係が成り立つでしょう。計算や熟慮や計画なしに、ある意味ではそれと知らずに作られ、産み落とされるもの。作り手の名を持たず、作り手のもとへと帰ってこないもの。作り手自身の似姿ではないもの。さらに言えば、本当に自分が作ったものかどうかさえ、認知することのできないもの。このようなものを、彼は散種の子どもと呼びます。

誰かが自分自身の子どもたちを愛することができるのは、もちろん、その子どもたちが彼に彼自身の似姿を、彼自身の名を送り返す限りでのことにほかなりません。けれども、もしも子どもが親の名を持つことに、親に似た似姿に要約されるのだったら、もしも子どもが、立ち去っていく者、彼の名とは違った者でなかったら、人々は子どもを愛することがやはりできなideしょう。(デリダ『歓待について』)

わが子をどこか知らないところから飛んできた種のように受け入れること。そして、わが子が私にはわからない言葉を話し、私には決してふれることのできない見知らぬ他者であるがゆえにいつそう、わが子を愛すること。そのようなことは可能であるだけでなく、そのようにしてしか人はわが子を愛することはできない、とデリダは言うのです。なぜなら、おそらく愛という言葉を使うことができるのは、他者との間でしかないからでしょう。わが子もまた他者である。しかし、ある特別な仕方では出会ってしまった、ある特別な他者である。親となるということは、こうした他者を受け入れることを学ぶことに他ならないように思われます。

(もりたのぶこ
森田伸子『子どもと哲学を 問いから希望へ』による)

(注) 1 ハイデガー——ドイツの哲学者(一八八九―一九七六)。

2 デリダ——フランスの哲学者(一九三〇―二〇〇四)。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①
⑤

(ア)

- ① トロウに終わる
② キトにつく
③ 本音をトロする
④ トタンの苦しみを味わう
⑤ カト期を迎える

(イ)

- ① 借金をセイサンする
② 文章がセイコウだと批判される
③ シセイに交わる
④ 故郷にキセイする
⑤ 同窓会はセイキョウを呈した

(ウ)

- ① 人心がコウハイする
② ソウコウ車を製造する
③ 表面にコウタクがある
④ 敵陣をコウリヤクする
⑤ 契約をコウシンする

(エ)

- ① 決定事項をセンコクする
② 欠点をコクフクする
③ コクゲンに間に合う
④ コクジしている商品
⑤ 大名のコクダカを調べる

(オ)

- ① ヒニクを言う
② 意見をヒロウする
③ ヒレイな態度に怒る
④ 心臓がヒダイする
⑤ ヒコク人を弁護する

問2

傍線部A「子どもに手を焼いたあげく、『こんな子どもはいらない』と、時として叫んでしまう親」とあるが、こうした「親」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 子どもが親の期待を裏切ってしまったら、その子の心身のすべてを創造した親である以上、ためらうことなく子どもの存在を消去しようと身構えている。
- ② 子どもが親の思惑と異なるようになったら、それは親の育て方が間違っていたことになるので、自分のためにも子どもの存在を否定してしまおうと考えている。
- ③ 子どもが自分の思惑どおりにならないと、その子どもを創造したのは自分だと思っているだけに、つい取り乱してしまい心にもないことを口走ってしまう。
- ④ 子どもが自分の意に沿うように育たないのならば、その子どもをこの世に誕生させたのは他ならぬ自分なのだから、それを見捨てても構わないと思っている。
- ⑤ 子どもが不完全な存在でしかないことに気づいた時、その子の心身のありようは自分の似姿であるという事実を突きつけられ、思わず子どもに厳しく当たってしまう。

問3

傍線部B「『愛そうとしないのに、なぜつくった?』という怪物の叫び」とあるが、そうした「叫び」が生じたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 自分のことを創造してくれたはずのフランケンシュタイン男爵が、自分を愛してくれないばかりか、人間界からも追放しようとしたため、そうした冷酷な態度に不信感を抱き男爵を親として認められなくなったから。
- ② 生まれたくもない自分を人造人間として創造したフランケンシュタイン男爵が、当初の思惑とは異なるように育てしまったという理由で、子どもを愛し育てるという責任を放棄したことに、強い憤りを抱いているから。
- ③ 優れた科学者として生命体の創造にさえ成功したフランケンシュタイン男爵が、そうした自身の行為に対して恐怖を覚えるようになったため、そんな親の理不尽なあり方に、子どもとしてやりきれない思いを抱かざるをえなかったから。
- ④ 創造主として自分に生命を与えてくれたフランケンシュタイン男爵が、作品としての出来栄えに不満だからという理由で、生命体に名前も与えず放棄してしまうという無責任さに、悲しみと怒りを覚え復讐^{ふくしゅう}心さえ抱いたから。
- ⑤ 自分の創造主であるフランケンシュタイン男爵に存在を認められ愛されることを望んでいたのに、かえって疎まれ見捨てられてしまい、自分の境遇に悩み絶望しつつも、自分の存在の根拠を男爵に求めるしかなかったから。

問4

傍線部C「『他者としてのわが子』を引き受ける」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 親はその遺伝的形質や教育を通じて子どもを創造し、子どもを親の作品であると同時に一つの独立した人格を持つものとしても認めるということ。
- ② 親は、子どもを愛する前提として、愛とはある人格が他の独立した人格に向けられる感情であることを認めなければならないということ。
- ③ 親が子どもに対し、心身にわたる強い親近感を抱きながらも、その子を自分とは絶対的に異なる存在として受け入れ愛すること。
- ④ 子どもは生まれてしばらくの間は親の似姿として存在し、成長とともに次第に個性的な存在になるが、親はそのことを受け入れるということ。
- ⑤ 子どもの心身が親の影響を強く受けているということを認めた上で、親が子どものことを非人称的な存在として大切にすること。

問5

傍線部D「デリダの『散種の子ども』という言葉」とあるが、デリダの言う「散種」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 書かれたものは、書き手を離れて多数の読者に読まれ、さまざまな意味を生み出し続けるが、そうした新しい意味の適否の判断が求められるということ。
- ② 書かれたものは、書き手の意図や意味づけを超えて多様に受けとめられ、新しい意味を生み出し続けるが、それによって時代や地域を超えた普遍性を獲得するということ。
- ③ 書かれたものは、書き手の思いとは無関係に新しい意味を生み出すが、そうしたさまざまな意味をまといながら最終的に書き手のもとへ帰ってくるということ。
- ④ 書かれたものは、書き手がそれを書いたこと自体を忘却することによって、書き手の意図や思惑を離れたさまざまな新しい意味を生み出すようになること。
- ⑤ 書かれたものが、書き手の考えや意味づけを超えてさまざまな読み手に受容され、書き手の感知しないところでもさまざまな新しい意味を生み出し続けるということ。

問6

この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

① 親と子どもとの宿命的な悲劇を描いた小説の意義を強調したあとで、今日の心理学や教育学が前提としている親子観の矛盾を指摘し、子どもを所有物であるかのように見なす意識を親が放棄することで、さわやかで生き生きとした親子関係を形成できると述べている。

② 親の身勝手さが生んだ惨劇をまず例示し、そうした惨劇の根底には子どもを親の創造物と見なす考え方があることを指摘したうえで、親は子どもに対し心身にわたる影響力の発揮をできるだけ抑制することで、子どもを独立した他者として尊重できるようになると述べている。

③ 創造主と創造物との不幸な関係を描いた小説の紹介を通じて親子関係の問題を提起し、子どもの存在は親によって与えられたものではないことを説いたうえで、親の子どもへの真の愛情とは、子どもへの強い愛着があるとしても独立した人格を持つものとして接することだと述べている。

④ あたかも創造主のように振る舞う親の犠牲になった子どもの悲哀を描いた小説を紹介したのち、子どもの存在は親の意思によるものではなく偶然性によって与えられるという考えに基づいて、親はそうした子どもに他者としてできるだけ距離を置いて接するべきだと述べている。

⑤ 人間の創造主になりたいという野心を抱いた科学者が生んだ悲劇を紹介し、それと子どもを親の創造物と見なしがちな現代の親が抱える問題との違いを検討するなかで、散種の子どもという言葉を導き手として、親子関係のあるべき姿について述べている。

第2問

次の文章は、八木義徳やぎよしのりの小説「風祭」かざまつりの一節である。小説家の志村伊作は、三十八年前に父が亡くなってから一度しか会っていない異母兄・高峰治彦の家を訪れることになる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。（配点 50）

伊作自身、すでに還暦をすぎて、「死」は必ずしも遠くないものになりつつある。げんに学生時代からの古い友人が、このころ三人も相次いで歿ぼつしている。日が経って彼の眼の前に立つのは、いずれも生ける日の彼らの姿である。

しかしいま、さし当って問題なのは母の方であった。一日の大半を寢床の中でうつらうつらとすごしている母の、その老耄ろうもうした頭脳のなかに、或る一人（注1）の女への消し難い「罪」の思いが煤黒すすくろく染みついているとすれば、それをまず祓はらってやるのが、息子の義務というものではなからうか。

「しかし、どうしたら、それを祓はらってやることができるのか？」

——ある日、その母がまた倒れた。浴室から出たとたん眩暈めまいを起したのである。さいわいどこにも怪我けがはなかったが、倒れるとき腰をひねったらしく、母は床に就いたまま動けなくなった。

A 伊作が、治彦を訪ねてみよう、とふいに思いついたのはその夜のことである。

10

二十二年ぶりの治彦はさすがに衰えていた。黒く豊かだった頭髮も、前頭部が大きく禿はげ上り、色もかなり褪あせている。むろん老いはこの治彦だけのものではなかった。伊作自身、頭はすでに八分通りの灰色である。ただ逆さに吊り上った太く濃い眉毛だけが、この二人に共通するものだった。そしてこれは彼らの「父」の眉毛でもあった。

「実はきょう伺ったのは、もし親父さんに、回顧録のようなものがあつたらば、と思つて……親父さんにはずいぶん沢山の日記があつたと思いますが……」

「それなのよ」と圭子が口をはさんだ。「実はね、お父さまが亡くなられて、あの高峰病院を島本さんにお譲りするとき、医学

書は別として、そのほかの本は全部始末しちゃったの。むろんお母さまと相談の上よ。ところが日記の方は、函館にお父さまと親しかったお医者さんがいらしてね、その方から『将来自分は高峰好之の伝記を書くつもりだから、日記だけは保存しておいてくれ』っていうお手紙を頂いてたもんだから、それだけはだいにこの田園調布の家(注2)に送ったのよ。大きな茶箱四つにぎっしり詰まってたわ。でも結局、お父さまの日記は、戦争中、そのお庭の真ん中で全部焼いちゃったのよ」

戦争も終りに近い昭和二十年の五月下旬、この閑静な屋敷町にも敵の焼夷弾(しょうい弾)が何十個か落ちて、ここからあまり遠くないところかなりの範囲にわたって焼けた。そのとき紙類だけはいつまでもぶすぶす燻(くすぶ)って、夜など、思いがけぬ時にまためらめらと赤い炎を上げて燃え出すことがある。それが敵機の目標になるというので、隣組長(注3)から『紙類は全部自発的に焼いて、完全な灰にしてくれ』というきびしい達示(注4)が出た。それで馬鹿正直に、だいに保存しておいたその日記類も全部庭に持ち出して焼いてしまった、という。

「いま考えれば、ほんとにバカなことをしたと思うわ」と圭子はまた話をつづけた。「でもね、あたし、その日記を焼くとき、ちよつとだけ覗(のぞ)いてみたのよ。あたしたちの結婚した日のところだけ。そしたらね、『治彦、圭子、本日結婚式を挙ぐ。』(注5) 感涙に咽(むせ)ぶ』って書いてあったのよ。あたし、うれしかったわ。でもね、うちの主人ときたら、手も触れなかったのよ。ね、あなた、そうでしょ？」

30 と圭子は治彦にいった。

「ああ、ぼくはひとの日記なんかには、全く興味はないから」

と治彦は無表情に圭子に答えてから、伊作の方に顔を向けた。

「わたしはあなたとちがつて、一人の人間の心のひだを奥深くさぐってみよう、という好奇心も関心も全く持てない人間なんです。そういうふうに頭が向いて行かない人間なんです」

35 「しかし、親父さんが亡くなった時、あなたが新聞にお出しになったあの死亡通知の文章は、(注6) 情理を尽くしたたいへん立派な文章だったと思いますよ」

「ああ、あれ……」

治彦はすこし驚いた声を出した。

「実はぼくの読んだその文章というのは、うちのおふくろがM紙の新聞から切り抜いて、親父さんの写真の裏に隠して置いたものなんです。つい先日、うちの家内がその写真を入れた額縁のガラスを掃除しようとして、思いがけなくそれが出てきたんです。親父さんの亡くなったのは、昭和十二年の六月十日ですから、ぼくがそれをはじめて読んだのは、実は三十八年目ということになりますね」

「そんな死亡通知を、あなたのお母さま、よくも取って置いて下さったのね」

と圭子がいった。高峰好之の死に当って、その遺族と少数の病院関係者だけでごく内輪に営まれたという葬儀に、伊作の母は45 むろん出席を許されなかった。

「実はね、今だからお話するけど、あなたのお家のこと、亡くなられたお父さまからあたしずいぶんいろいろきかされていたのよ。お父さまは、あなたの方のこと、とても愛していらしたわ」

圭子はその『実例』を驚くべき記憶力をもって次から次へと話してきかせた。その時々父の、ちょっとした言葉使い、ちょっとした表情、ちょっとした身振り、そういうものを圭子は巧みに演じてみせた。

すると、**B** それまで黙って聴いていた治彦がはじめて重い口をひらいた。(実際、この治彦は寡黙なタイプの男らしく、圭子のお饒舌^{しゃべ}りがつづいている間、彼は一語もはさまず、庭の芝生の一点に凝^じつと眼を当てたまま、身動きもせずにといた)

「ああ、その話、みんなぼくには初耳だな」

「だって、そりゃ、当たり前じゃないの。こちらのお家の話、お父さまだって、あたしだって、あなたにできるわけがないじゃないの」

55 圭子はぴしゃりと夫をきめつけた。治彦は別に表情も変えず、また黙って庭の芝生に顔を向けた。圭子はまた伊作に話しかけた。

「で、こんなことお質^{ちか}ねするのはたいへん失礼かもしれないけど、伊作さんは亡くなられたお父さまのこと、どう思ってた？」
いかにも圭子自身のいう通り、彼女の質問は伊作に対しては「失礼」なものだった。しかし伊作は、この（ウ）気さくで若々しい老女には答えやすかった。彼はその質問には直接答えず、別なことをいった。

60 「これはぼくらの子供の頃の話です。親父さんが家へやってくる時は、いつも躰^{からだ}じゅうからクレゾールの臭いをぶんぶん発散させているんですね。それをぼくらは「病院のにおい」といつてましたが……そして親父さんがやってくると、おふくろはそれまで貯めて置いた古新聞を一束抱えて二階へ上って行くんです。そうして二時間くらい経って親父さんが帰って行くと、おふくろはまたその古新聞を抱えて下へおりてくるんですが、その古新聞はみんな親父さんの習字の稽古^{けいこ}でまっ黒になっているんですね。それがぼくらにはなんとも不思議な感じでした。親父さんは酒は飲めない男だったし、おふくろはまたむずかしい話の相手がで

65 きる女でもないし、せっかく家へやってきても、親父さんにとっては、結局お習字の稽古でもするより仕方がなかったんですよ。とにかく、親父さんが帰ったあと、いつもおふくろが、墨でまっ黒になった古新聞を一束抱えて二階からおりてくる、という姿が、親父さんとおふくろとの関係で、ぼくにはいちばん強く記憶に残っています」

「ああ、それはいいお話をうかがいました」

と治彦がふいに思いがけぬことをいった。

70 「うちの親父にとっては、あなたのお家にいって、あなたのお母さんに墨をすってもらいながら習字の稽古をしている時間が、いちばん安らぎの時だったのでしょう。わたしの母は、親父にそういう安らぎの時間をあたえることのできない女だったんだと思います。息子のわたしから見ても、きわめて平凡な性格の女でしたが、やはり平凡な一人の女としてのジェラシーは確かにあったと思います。そしてわたしの方では、わたしが一人っ子でしたから、どうしても母の方につくようになって……」

「それは当然だと思います。げんにぼく自身、ぼくのおふくろの方についているわけですから」

75 「運命なのよ」

C 圭子がふいに大きな声を出した。

「みんな運命なのよ。高峰の家と志村さんのお家と、二つの家がこんなふうになったのは、みんな運命なのよ」
「運命という言葉は、たいへん都合のいい言葉だが……」

治彦が低い声でいった。

80 「だって、それを運命だと思えば、なんとなく心が落ち着くでしょ。聖書だって、お経だって、そこに書かれてある言葉はみんな人間の心に安らぎと落ち着きをあたえるための言葉じゃない？」

「運命という言葉は、ほくもあまり好きじゃないけど、この言葉を使うと、なんとなく落ち着くことは落ち着きますね」と伊作はいった。

「そうよ。あたしたちだって昔はずいぶんいろいろなことがあったけど、このひとと夫婦というものになったのは、これは自分の運命なんだと思ったら、すっかり落ち着いちゃったわ」

落ち着きすぎるほど落ち着いている、と伊作は思った。

D 「伊作さん、あなた、音楽がお好き？」と圭子はまたふいにいった。

それは伊作がこの応接室へ通された時から気がついていたことだが、天井の高い、そしてかなり広い面積を持ったこの部屋の壁に、三段ほどに吊^{つる}された木の棚はすべてぎつしりと詰まったレコードの蒐集^{しゅうしゅう}集だった。

90 「うちの主人たらね、ほかに道楽はなんにもないけど、ただもう音楽を聴くことだけが愉^{たの}しみで生きているような人なのよ」

「どうですか、もし音楽がお好きだったら、いっしょに聴きませんか？」と治彦がいった。

「ええ、ありがたいですけど、もうずいぶんなくお邪魔しましたから、これで失礼させていただきます」

治彦と圭子に送られて、玄関に立ったとき、

「伊作さん」

95 はじめて治彦は伊作の名を呼んだ。

「お家へお帰りになったら、お母さんにくれぐれもよろしく申し上げて下さい」

^E伊作はぎくりとした。思いもかけぬ治彦の言葉だった。その治彦の顔に、すこし照れたような微笑が浮かんでいる。
「ありがとう。帰ったら、必ず母に申し伝えます」

伊作は一礼して高峰家を辞し静かな屋敷町の坂をゆつくり下った。

(注) 1 或る一人の女への消し難い「罪」の思い——かつて妻子ある高峰との間に子供（伊作はその一人）をもうけた母は、近年とみにその頃のことを振り返り、高峰の亡き妻への申し訳なさを口にしていた。

2 田園調布——東京の地名。

3 隣組——第二次大戦下、国民統制のために作られた地域組織。

4 達示——通告。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 11 13。

(ア) 感涙に咽ぶ

11

- ⑤ 激昂に駆られる
- ④ 感激のあまり泣く
- ③ 涙で眼がかすむ
- ② 声を詰まらせる
- ① 不覚にも泣いてしまう

(イ) 情理を尽くした

12

- ⑤ 感情を上手くコントロールできる
- ④ 安易な感傷に流されることのない
- ③ 人の気持ちを筋道だつて理解できる
- ② 人情の機微や道理に十分通じた
- ① 理性と感情のバランスが取れた

(ウ) 気さくで

13

- ⑤ 勿体ぶらない
- ④ 気心の知れた
- ③ 思慮の浅い
- ② 軽はずみな
- ① 気遣いのできる

問2

傍線部A「伊作が、治彦を訪ねてみよう、とふいに思いついたのはその夜のことである。」とあるが、ここでの「伊作」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

① 高峰の妻への遺憾の念を口にする母の気持ちを何とかみ取りたいと思いはするが、高峰もその妻も亡くなった今、母の思いを伝える相手は高峰の息子しかいないため、異母兄でありながらこれまでつき合いのなかった治彦に会うほかないと覚悟を決めている。

② 老いを迎えた母が過去の思い出に浸ることで現実から逃避しようとするのは分からないでもないが、老耄は次第に進行しているのだから、ちょっとした不注意も大事につながりかねないと思い、自分のできることをすぐにでもしておかなければならないと思っている。

③ 高峰の妻に謝りたいという母の願望は、その相手がすでに他界している以上実現することはありえないが、老いた母の今後を考えるとそれが最後の母のわがままなのだから何とか力になってやりたいと思い、相手の息子に協力を呼びかけようと心に決めている。

④ 老い先の短い母が高峰の妻への拭い^{ぬぐ}がたい思いにとらわれ苦しんでいるのを目の当たりにすると、息子として母の苦しみをやわらげたいと思いはするが、その最良の手だてが見あたらないなか、治彦に会って何らかの手がかりだけでも得たいと思っている。

⑤ 老いた母が高峰やその妻に謝罪しようと心に決めていることを知った以上、息子の自分としてはそうした母の思いを叶^{かな}えるためにも、これまで会うことをかたくなに避けていた、高峰の息子と話し合うことから始めるしかないと考えようになっている。

問3

傍線部B「それまで黙って聴いていた治彦がはじめて重い口をひらいた。」とあるが、この場面での「治彦」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 伊作の訪問に心喜ばないものを感じていたため、伊作にことさら無愛想な態度を取りがちであったが、伊作や圭子の話に耳を傾けるうちに、自分の知らない父の姿や父と伊作の家族との強い結びつきを知ることになり、伊作に対する態度を改めねばならないと思いはじめている。

② 突然の伊作の訪問に戸惑い、自分たち家族の平和が乱されるのではないかと危惧していたが、伊作の父母を思う気持ちの強さに感銘を受けるとともに、妻が自分の両親をひそかに気遣ってくれていたことを知って、自分も息子として父のことを語るべきだと思いはじめている。

③ 自分の書いた父の死亡通知を伊作の母が大切に隠し持っていたことを伊作から知らされたり、父が生前伊作の家族に対する思いを口にしていたことを妻から聞かされたりして、父や父をめぐる人々のさまざまな思いに触れ、自分自身も当事者の一人として心を動かしはじめている。

④ 妻の圭子から父が伊作の家族を愛し慈しんでいたことをはじめて聞かされることになったのだが、その身振り手振りを交えた具体的な話しぶりの効果もあって、母や自分が結局のところ父には愛されていなかったということが骨身に堪え、その苦い思いを噛みしめている。

⑤ 伊作や圭子の話を聞くうちに、自分の母よりも伊作の母の方がより深く父を愛していたのだということに思い至り一抹の淋しさを感じながらも、今となってはそのことをどうすることもできないと考え、今後に向けて二つの家族の和解を願う気持ちが生じはじめている。

問4

傍線部C「圭子がふいに大きな声を出した。」、傍線部D「『伊作さん、あなた、音楽が大好き?』と圭子はまたふいにいった。」とあるが、こうした言動をとる「圭子」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 自分に注目を集めるために、脈絡なく話題を振って人の話の腰を折ってしまいがちだが、その剽軽^{ひょうきん}な話しぶりが周りの人々の気持ちを和ませることも多く、どこか不思議な魅力を持つ人物として描き出されている。
- ② その場での自分の思いをためらいなく口にする自分勝手なところもある人物として描かれているが、そのとらわれのない振る舞いで場の雰囲気を変え、伊作と治彦のやりとりを促す存在としても設定されている。
- ③ 治彦や伊作の思いをどこまで理解しているかわからない人物として登場するが、その天性の勘の鋭さで人の感情のおもむく先を見通すことができるため、人を傷つけたりはしない善良な人物として位置づけられている。
- ④ 優柔不断な夫に代わって一家を支えてきたという自負心が強く、自分の我を押し通す人物として描かれているが、最終的には夫のことを配慮し夫を立てるように振る舞うという賢さを持った女性として造形されている。
- ⑤ 寡黙な夫に代わって客人の相手をするが多かったため、治彦と伊作が二人だけで話をしようとしても何の悪意もなくつい口出ししてしまい、そのことでその場の雰囲気を壊してしまう存在として描かれている。

問5

傍線部E「ありがとう。帰ったら、必ず母に申し伝えます」とあるが、このときの「伊作」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 口数の少ない治彦から予想もしなかった自分や母への温かい言葉を聞き、自分としても高峰の家にそれまで感じていた隔たりが埋まるような思いがしている。
- ② 治彦の思いがけない言葉によって母のこれまでの執着を払拭^{ふつしよく}することができ、しみじみとした喜びのなかで、異母兄に対する感謝の念を噛みしめている。
- ③ 母への親愛の情を示す治彦の言葉を、すべては運命だという圭子が言った言葉と結びつけ、思いがけない人の縁に深い意味を見いだしている。
- ④ 伊作の家と治彦の家との間でゆえなく生じたいざこざが、伊作やその母を受け容れようとする治彦の言葉によって解消されていくような思いがしている。
- ⑤ 伊作と治彦がそれぞれの母を大切に思うことに変わりはないということを、治彦の言葉がそれとなく示しているように思えて、驚きを禁じえないでいる。

問6 この文章中の叙述に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わな

い。解答番号は 18・19。

- ① 12・13行目の「逆さに吊り上った太く濃い眉毛だけが、この二人に共通するものだった」という身体表現は、伊作と治彦が異母兄弟であることを表すとともに、長年にわたる二人の確執の根深さをも暗示している。
- ② 19・20行目の「大きな茶箱四つにぎっしり詰まっていたわ」という圭子の大仰な発言は、伊作の父である好之が、伊作同様に自己の内面を凝視し続けたことを示唆し、小説家としての資質をもつ人間であつたことを伝えるものとなっている。
- ③ 22行目のように紙類が燃える様子を「ぶすぶす」「めらめら」と擬声語を用いた表現は、戦火の激しさや悲惨さをよりリアルに伝え、そのことで戦争に対する批判的な思いをかき立てるといふ効果を生んでいる。
- ④ 50・51行目の（ ）部に描かれた治彦の「寡黙」は、治彦の性格の一端を示しているだけでなく、この作品の背景にある二つの家が抱え込むことになってしまった重い問題と響き合っている。
- ⑤ 58行目の「失礼」なものだった」や、86行目の「落ち着きすぎるほど落ち着いている」などの表現からは、伊作が圭子の発言や振る舞いを冷静に評しつつ、それを好意的な眼差しで捉えていることがうかがえる。
- ⑥ 88・89行目の「天井の高い」部屋や「レコードの蒐集」に関する描写は、木訥な伊作とは違って治彦の趣味が洗練されていることを示すだけでなく、両者の生活水準や境遇の差までも際立たせている。

第3問

次の文章は、『扇ながし』の一節である。少将の恋人である姫君は、不実な行いのあった少将を恨んで姿を消した。少将はそれを知り、姫君を捜すため、兵部尉ひとりひょうぶのじゆうを伴って旅に出た。以下の文章は、それに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

日数もやうやう重なれば、少将殿も兵部尉(注)も、ともに身も弱り、心も疲れはて給ひけり。あまりのことに、兵部尉は、道行き人に会ひては、「かやうの人には会ひ給はぬか」と問ひけれども、「いや、さやうなる人には会はず、行方も知らぬ」とて、(ウ)通(ウ)りけるこそうたてけれ。さりながら、あまりの悲しさに、行き来の人に問ひければ、年のほど五、六十ばかりの女房の、見苦しからぬさまなるが、この人々のありさまを見奉りて、涙を浮かべて申しけるは、「いかなる人にてまします」と問へば、兵部尉、申しけるは、「(イ)何をか今はつつむべき。これは都方にわたらせ給へる御人なるが、思ひのほか、我が思ひ人の、恨みありていづくとも行方知らずになり給ひしを、悲しきことに思し召し、命のあらん限りはたづね給はん」とて、父母御にも知らせ給はず、この二、三十日がほど迷ひ a 給へり。ならばぬ道を、かなたこなたと心を尽くし給へば、今ははや御命も限りと見えさせ給ふ」とて、かきくどきければ、尼君、聞き給ひて、「X さてともあはれなる御ことかな」と、ともに涙を流してのたまひけるは、「されば、この川の奥にこそ、心あるさまの人々は、都より来りておはしますぞや。御いたはしきことかな」とて、ふところより御葉などを取り出だし、少将殿に参らせければ、兵部尉は水をむすびて b 参らすれば、心地少しよくなり給ひけり。「さて、その所へはいづくを行くぞ」と問ひ給へば、「これをあなたへ少し行きて、細き川あり。その川端につきて上り給へ」と、(ウ)ねんごろに教へけり。

さて、また、姫君は、憂うれかりし人を恨みしゆゑに、かかる所へは来りけるよ、さりながら、父母の御菩提ぼだいをもとぶらはばやと思しければ、ただ一すぢに後の世のちのいとなみ、大事と思し召し、心を澄まさせ給へども、折々は形見などを見給ひては、少し心も乱るれば、とても、憂き世をそむく身となりて、かかる思ひはあさましきことなれば、少将殿、手なれ給ひし扇をば、形見として持ち給へるも、よしなきことなり。見るたびごとに、恨めしさはまさりけり。今は何にかせんとて、住み給へる庵室あんじつの前を

流るる川へうち入れ給ひて、かくばかり、

A 憂き人の形見に残す扇さへ見れば涙を流しぬるかな

B 限りなく思ひしことは遠ざかりあらぬかたなる墨染めの袖

C 底までも清き流れの水なれば我が心さへすめるなりけり

かやうに口ずさび給ひて、思ひ切り給へども、落つる涙はひまもなし。また、少将殿は、尼御前の教へにまかせて、細き川について上り給ふが、あまり苦しさに川の端なる岩に腰をかけて、水に流るるもみぢ葉の浮かべるを見給ひて、

D さだめなく流るる川のもみぢ葉とまる所はありけるものを

この川に流るるもみぢ葉も、我が身のありさまも、いつとまるといふことを知らず、流れさそはれゆくことの悲しさ、やるかたもなく、涙を流し給ふ。ここに、川上より、人の手なれたる扇の流れけるを、取り上げて見給ふに、にほひ深く、美しき絵などあり、まことによしある風情あり。ものを書きたるを見給へば、

「**E** つらしとも思はぬ我をともしれば扇の風におどろかすらん

よしなきものは、形見なりけり」と書きとどめたり。この扇を見れば、我が持ちなれし扇なり。歌はたづぬる人の手なりと見るに、肝^{きもだましひ}魂も消えはてて、いかさまにも、この人は川に身を投げたるにやと思ひ、我ももろともに身を投げんとぞ思ひ給ひける。

この扇を胸に当て、顔に当て、なつかしきことかぎりなし。死に給へると聞きたらんときは、我が身は何とかならんと、**Y**心細さは限りもなし。

(注) 兵部尉——少将の乳母^{めのと}の子。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20

22

。

(ア) 通りけるこそうたてけれ

20

- ① 行き来したのでくたびれた
- ② 通り過ぎたのが情けない
- ③ 行ってしまったて悔しく思った
- ④ 無視されてうちひしがれた
- ⑤ 通って行ったのはしょうがない

(イ) 何をか今はつつむべき

21

- ① なぜまだわからないのだろうか
- ② すでに何か知っているのか
- ③ 何も今は打ち明けたくない
- ④ 今は何を隠したりしようか
- ⑤ 今頃何を遠慮しているのだろうか

(ウ) ねんごろに教へけり

22

- ① 喜んで教えた
- ② 正直に教えた
- ③ あえて教えた
- ④ 進んで教えた
- ⑤ 親切に教えた

問2 波線部 **a** ～ **c** の敬語の説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

23

- | | | | |
|--|---|----------|-------------------|
| | ① | a | 兵部尉から少将への敬意を示す尊敬語 |
| | | b | 作者から少将への敬意を示す謙讓語 |
| | | c | 作者から父母への敬意を示す尊敬語 |
| | ② | a | 少将から尼君への敬意を示す謙讓語 |
| | | b | 兵部尉から少将への敬意を示す尊敬語 |
| | | c | 作者から姫君への敬意を示す尊敬語 |
| | ③ | a | 兵部尉から少将への敬意を示す謙讓語 |
| | | b | 兵部尉から少将への敬意を示す謙讓語 |
| | | c | 作者から姫君への敬意を示す尊敬語 |
| | ④ | a | 兵部尉から少将への敬意を示す尊敬語 |
| | | b | 作者から少将への敬意を示す謙讓語 |
| | | c | 作者から姫君への敬意を示す尊敬語 |
| | ⑤ | a | 作者から尼君への敬意を示す謙讓語 |
| | | b | 作者から少将への敬意を示す尊敬語 |
| | | c | 作者から父母への敬意を示す謙讓語 |

問3

傍線部X「さてまあはれなる御ことかな」とあるが、この言葉には尼君のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

- ① 高貴な若君が、恋しい姫君に会いたい一心で慣れない長旅を続けたために、今にも死にそうに感じられるほど心身ともに疲れはてている様子を目の当たりにして、深く胸を痛める気持ち。
- ② 都に住む高貴な若君が、行方不明になって生死も定かではない姫君を捜して、生きているならば何としても会いたいと思う、その一途^{いちず}な心情に触れて、強く感動する気持ち。
- ③ 高貴な若君が恋人の姫君を命がけで捜しているのを知ったが、どうやらその姫君は自分の知人のようなので、若君に居場所を教えられないかと思い、たいそう興奮する気持ち。
- ④ 自分の前から姿を消した恋人に謝罪したい一心で、都を出てから何十日もさすらっていると打ち明けた、高貴な若君のあわれな姿を見て、ひどく気の毒に思う気持ち。
- ⑤ 親の反対を押し切って長く苦しい旅をしたものの、ついに旅の目的を遂げることなく路傍で命を終えようとしている高貴な若君の悲運に対して、しみじみと痛ましく思う気持ち。

問4

25

A～Eのそれぞれの歌の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は。

- ① Aは、去って行った恋人の自分に対する冷淡な仕打ちを思い出させるものは、今となつてはその人が残した忘れ形見の扇だけなので、涙とともにその扇も流してしまおう、と詠んだ歌である。
- ② Bは、つらかった日々は遠い過去のものとなったから、亡き父母を弔うために着ていた喪服を脱ぎ、暗い気持ちからも抜け出して、これまでとは違った道を歩むつもりだ、と詠んだ歌である。
- ③ Cは、目の前の川は水の底まで見通せるほど清らかで、それを見ていると自分も澄んだ気持ちになるので、その流れの中に自らの住み処^かを求めて身を投げよう、と詠んだ歌である。
- ④ Dは、紅葉は川に流されてもいずれはどこかにとどまるのに、恋しい人は自分から遠く離れて行き、今もどこかをさまよっているのだから、それを思うとやりきれない、と詠んだ歌である。
- ⑤ Eは、別れた恋人を薄情だとももう思っていないはずの自分なのに、それでも時として形見の扇を目にすると、その人を思い起こして恨めしくなるのはなぜだろうか、と詠んだ歌である。

問5

傍線部Y「心細さは限りもなし」とあるが、このときの少将の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 流れてきた扇は、かつて自分が姫君に贈った扇だったので、やはりこの先に姫君の住む家があるのだとうれしく思う一方で、扇が川を流れてくるのは姫君の身に何かあったからではないかと、たとえようもなく気がかりに思う心情。
- ② 流れてきた扇を見ると、もともと自分が持っていたもので、しかも姫君の筆跡で歌が書かれていたので、姫君は川に身を投げたのではないかと思い、姫君が死んだなら自分はどうなってしまうのかと、この上なく不安な心情。
- ③ 流れてきた扇を見て姫君が川に身を投げたと思い、いったんは自分も身を投げようという気持ちになったが、扇を胸に当てると懐かしさがこみ上げて、思い出にすげれば生きていけないのではないかと、かすかな希望を抱く心情。
- ④ 自分がかつて姫君に贈った扇が流れてきたので、姫君が自分に対する愛情をなくしてその扇を捨ててしまったのだと悟り、悲しみのあまり、いつそのこと川に身を投げて死んでしまおうかと、いつまでもくよくよと悩んでいる心情。
- ⑤ 流れてきた扇は、かつて歌を詠み交わした時に姫君が手に持っていたものだど気がついて懐かしく思ったものの、姫君がもうすでに死んでしまっている以上、いまさらどうしようもないのだと、どこまでも悔やまれる心情。

問6 この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

① 少将と兵部尉が徐々に疲労の度を深めていく様子が段階を追って詳細に記された後で、突然登場した年老いた尼君によって二人が救われる展開になっているため、その喜びが強調されるとともに、尼君は困窮した衆生しゅじょうを救う菩薩ぼさつの变化げであったことが暗示され、物語全体が仏教的世界観を背景としていることがうかがわれる。

② 『伊勢物語』や『源氏物語』といった平安時代の作品などによく見られる、都で何不自由なく育った貴公子が恋のため一時地方に流されて苦労するという典型的な筋書きに沿って作られており、伝統的な和漢混交文の文体であることもあいまって、物語全体の懐古的な雰囲気的印象深く伝わってくる。

③ 前半部は、登場人物の会話を中心に物語が展開し、中でも兵部尉と尼君の発言によって、少将の事情が明らかにされ、また姫君の居場所の手がかりが示されるが、後半部では、まず姫君の様子が描かれた後に、続いて少将の様子が描かれ、それぞれの思うにまかせない心情が、二人の歌を中心として表現されている。

④ 前半は、兵部尉と尼君それぞれの視点から、少将と姫君の関係についてわずかな希望があるように描かれているが、後半は、姫君と少将の歌のやりとりを通じて、二人の心のすれ違いが取り返しのつかないことのように描かれ、ひとつの事態に対し、立場によっては感じ方が違ってくるという人生の真理が伝わるようになっていく。

⑤ 後半の、少将が川べりの岩の上に座り込んでいる場面では、川上から紅葉に交じって美しい扇が流れてくる様子が視覚的に鮮やかに描かれる一方、川瀬や風の音、鳥の声など聴覚的な描写が一切省かれていることで、尼君にだまされたと絶望する少将の耳には、周囲の物音がまるで入ってこないという様子が示されている。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

（配点 50）

後周韓褒、為北雍州刺史。州带北山、多有盗賊。褒密訪之、並

豪右所為也。而陽不之知、厚加礼遇、謂曰、「刺史起自書生、安

知督盜。所頼卿等共分其憂耳。」乃悉召桀黠少年、素為鄉里患

者、置為主帥。分其地界、有盜發而不獲者、以故縱論。於是惶懼

首服曰、「前盜発者、並某等為之。」所有徒侶、皆列其姓名。或亡命

隱匿者、亦悉言其所在。褒乃取盜名簿、藏之、因大榜州門曰、「自知

行盜者、急來首、即除其罪。」今月不者、顯戮其身、籍没妻子、

賞先者。」旬日之間、諸盜咸悉首尽。褒取名簿勘之、一無差

異。並^{ビニ}原^{ゆるシ}其^ノ罪^ヲ、許^{スニ}以^テ自^ニ新^ス。由^リ是^レ群盜屏息^(注15)。

E

(鄭克『折獄龜鑑』による)

(注)

- 1 後周——南北朝時代の北周王朝（五五七～五八一年）のこと。
- 2 韓褒——人名。
- 3 北雍州刺史——「北雍州」は地名。現在の陝西省耀県。「刺史」は官職の名。州の長官。
- 4 帶^ニ北山——北山の山並みに囲まれている。
- 5 豪右——有力者。
- 6 督^レ盜——盜賊を取り締まる。
- 7 桀黠——凶暴で悪賢い。
- 8 主帥——総指揮官。
- 9 惶懼首服——恐れおののき、自首して罪に服する。
- 10 徒侶——仲間。
- 11 大勝——大きな立て札を立てる。
- 12 顯戮——見せしめに死刑にする。
- 13 籍没——罪人の財産を没収する。
- 14 旬日——十日間。
- 15 屏息——息をひそめる。

問1 傍線部(1)「所_レ有」・(2)「自_レ新」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ

選べ。解答番号は 28 ・ 29。

(1)

「所_レ有」

28

- ⑤ 手に余る
④ 残りの
③ 逃_レげている
② すべての
① 思いついた

(2)

「自_レ新」

29

- ⑤ 心を入れ替える
④ 再_レ審理を求める
③ 別人になりすます
② 自由に振る舞う
① 国に身を捧_レげる

問2 傍線部A「而陽不之知、厚加礼遇」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の

- ①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

① 而陽不_ニ之知、厚加_レ礼遇

而して陽に_{あきらかこれ}之を知らずして、厚く礼を加へて遇せられ

② 而陽不_レ之知、厚加_ニ礼遇

而るに_ゆ之かずして知ると陽_{いつは}りて、厚く礼遇を加へ

③ 而陽不_レ之知、厚加_レ礼遇

而して陽に之かざるも知りて、厚く礼を加へて遇し

④ 而陽不_ニ之知、厚加_ニ礼遇

而るに陽りて之を知らずとし、厚く礼遇を加へ

⑤ 而陽_レ不_レ之知、厚加_ニ礼遇

而して之かざるを陽るを知るも、厚く礼遇を加へられ

問3 傍線部B「所頼卿等共分_レ其憂_二耳」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番

号は 31。

- ① 私があなた方をお願いするのは、給料に見合った仕事をしていただくことです。
- ② 私があなた方をお願いするのは、全員そろって他の土地に避難してくれることです。
- ③ 私が頼みとするのは、あなた方が一緒に盗賊の取り締まりに当たってくれることです。
- ④ 私が頼みとするのは、あなた方が私と共存共栄の道を探ってくれることです。
- ⑤ 私が頼みとするのは、あなた方がみな学問に励み身を慎んでいてくれたことです。

問4 傍線部C「惶懼首服」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 32。

- ① 韓褒が土地の不良少年に盗賊の取り締まりに当たらせ、盗賊が捕縛されない場合は、故意に見逃したと見なして、彼らを処罰することにしたから。
- ② 韓褒が土地の有力者が盗賊の捕縛に非協力的であることに怒り、盗賊を捕らえた者に褒美として有力者の土地を分け与えることにしたから。
- ③ 韓褒が盗賊の被害にあつた土地の人々に武器を貸し与えて自警団を組織させ、盗賊と見なした者を捕らえて殺す権限を彼らに与えることにしたから。
- ④ 韓褒が住民に盗賊を見逃すように命じたことで、盗賊は韓褒を見くびって横暴に振る舞うようになり、耐えかねた住民自身が摘発に乗り出したから。
- ⑤ 韓褒が土地の盗賊自身に盗賊の取り締まりに当たらせたと結果、油断した盗賊が姿を現し、一度に全員を逮捕することに成功したから。

問5

33

本文中の二箇所の空欄。

X

にはどちらも同じ語が入る。その語を次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

⑤ ④ ③ ② ①

分 隠 盗 除 首

問6 傍線部D「一 無_二差_一異」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 34。

- ① 町の有力者の人数と自首した盗賊の人数が一致していた。
- ② 盗賊が自首した罪状と被害届に記された内容が一致していた。
- ③ 立て札に記された自首の期日と盗賊が出頭した日が一致していた。
- ④ 届け出のあった被害額と盗賊が自首した金額が一致していた。
- ⑤ 名簿に記された名前と自首した盗賊の名前が一致していた。

問7

傍線部E「群盗屏息」とあるが、韓褒が盗賊の取り締まりに成功した理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 盗賊の取り締まりの経験もなく、土地の事情にも通じていないため、謙虚に土地の有力者に助言を求め、住民の信頼を得ることに力を注ぐなど、地域の協力を仰いで準備を整えた上で逮捕に乗り出したから。
- ② 事前調査で土地の者が盗賊だと知りながら、素知らぬ顔で土地の者に取り締まりに当たらせて威圧する一方、期限を切って自首した者は罪を許し、自首しなかった者は厳罰に処すという飴と鞭を巧みに使ったから。
- ③ 事前調査で捕らえた盗賊自身に盗賊の取り締まりに当たらせるとともに、密告した者の罪を許すことによって盗賊同士の不信任感を煽って内部分裂をはかり、結果として盗賊が自滅するように追い込んだから。
- ④ 土地の有力者を含め地域全体の住民が盗賊と何らかの関係があることを突きとめ、さらにその根本的な原因がこの地域の貧困にあることを知り、地域経済を豊かにすることによって盗賊の数を減らしたから。
- ⑤ 土地ぐるみで犯罪を隠蔽していることに気づき、表面的には道徳を基本とした寛大な政治をする一方、裏では住民の密告を奨励する恐怖政治を行って、少しでも罪を犯した者はすべて逮捕してしまったから。

